ヨーロッパ、特にフランスにおける シナ学、仏教学の現状

ポール・ドミェヴィル

二十世紀の初頭、シナ学はフランスにおいてその面目を一新し非常な進展を見たが、それはエドワール・シャヴァンヌ(Edouard Chavannes, 1865—1918)の力によるところが大であった。一方仏教学はシルヴァン・レヴィ(Sylvain Lévi, 1863—1936)及びドゥ・ラ・ヴァレ・プサン(Louis de La Vallée Poussin, 1869—1938)によって大いに発展した。この二人はインド学者であって、中国語を学んだのであるがそれは古代インド史、特に仏教学に関して中国側の文献を利用したいという目的からであったに過ぎない。したがってそれは常にインド的視野からなされたのである。これに反してシャヴァンヌは元来シナ学者であって、彼の場合仏教学を学んだといっても、それは仏教そのものというより、主としてインド・中央アジアとシナとの交渉について仏教文献が多くの知識を与えてくれるという視野からなされたのである。この三人の学匠に続いてフランスに現われた世代はその弟子にあたる人々であって、彼らは師匠の存命中すでに活躍していたが、その弟子達の中で特に三人がシナ学の領域において抜群の力量を持っていた。すなわちポール・ペリオ(Paul Pelliot, 1878—1945)、アンリ・マスペロ(Henri Maspero, 1883—1945)、マルセル・グラネ(Marcel Granet, 1884—1940)である。ペリオは文献学者であって、彼の博識はシナだけでなくシナに隣接するすべての地域にわたっており、例えばインドシナやイスラム化される以前の中央アジアやトルコ・モンゴル系の人種の交錯する内陸アジアについても広い知識をもっていた。(しかし日本や朝鮮については学識はなかった。)ペリオはヨーロッパにおいて純粋にシナ仏教学

に従事した先駆者の一人であって(「牟子理惑論」の飜訳や非正統的な仏教の宗派「白蓮宗」「白雲宗」の研究などがある)、彼の研究は続いてマスペロがこれを継ぐことになった。マスペロは特に、中国における仏教の初期段階について、及び漢代や六朝時代の道教との関係について研究した。それは彼の主著である歴史書「古代中国」の継続を意図したものである。一方上述の二人とは異なり、グラネは社会学者であって中国文明の最も古い層に属する資料に特別な興味を寄せた人であるが、実はグラネは仏教を全然好まなかったのである。

このペリオ、マスペロ、グラネ三氏の世代は第二次世界大戦において一挙に葬むり去られてしまった結果、彼らに続いて現われた世代のシナ学者らは仏教学の分野において多少後退した観は否定出来ない。それにはグラネの学風が若いシナ学者の幾人かの上に強く影響していることがあるとも言えるのである。ジャック・ジェルネ(Jacques Gernet)氏は一九五七年以来パリ大学文学部の教授をしている人であるが、彼の処女作は敦煌出土の神会に関する文献の飜訳であり、つづいて提出された大部な学位論文は十世紀までの中国仏教史に関する経済的社会的側面を検討したものである。それ以来ジェルネ氏は仏教学の研究よりも次第に古代中国史の研究に従事するようになったのである。

同じような傾向は、今日ヨーロッパにおけるシナ学の重鎮とみなされる学者の大部分にも顕著である。たとえばドイツではエリッヒ・ヘニッシュ(Erich Haenisch)、ヘルバート・フランケ(Herbert Franke)、ヴォルフガンク・フランケ(Wolfgang Franke)、グスタフ・デボン(Gustav Debon)といった人々は余技として仏教に関心を持っているに過ぎない。同様にイギリスでもプュリーブランク(Pulleyblank)、トゥイチェット(Twitchett)、ホークス(Hawkes)といった人々は中国の言語や歴史や文学の研究に従事している。別の一つの領域、すなわちイスラム化される以前の中央アジア(いわゆるセリンディア)の研究という領域においてはコータン語原本の専門家であるベイレー(Sir H. W. Bailey)卿やカロシュティー語の原本研究の専門家であるジョン・ブラフ(Gohn Brough)氏はやはり純粋にただ文献学的な方法で仏教にふれているのみである。

ヨーロッパにおける本来の意味でのシナ学やそれに伴う中央アジア学の現状について皆様に報告するのはこれ位にした方がよいと思う。というのはこの大学のように

仏教系の大学で多くの方々に興味があるのは所詮仏教学研究であろうからである。

今日ヨーロッパで仏教学に関する最も優れた専門家はいうまでもなく私の友人、ルーヴァン大学教授、エティエンヌ・ラモート貌下(Monseigneur Etienne Lamotte)である。ドゥ・ラ・ヴァレ・プサン先生に従ったラモート師は言語習得上異常ともいうべき能力を持った人で、徹底的にサンスクリットや、パーリ語を習得されただけでなく、チベット語、特にシナ語をも習得された。シナ語に関する知識では、ラモート教授は前代のプサン教授やレヴィ教授よりも遙かに優れたものであると言いうる。ご承知のように師は「解深密経」「摂大乗論」「大智度論」「維摩経」の飜訳をされ、なおその他大乗の根底をなす諸文献の飜訳をしているが、師の飜訳には常に実に有益な註が豊富につけられていて、その点ではプサン先生の飜訳と酷似している。またラモート師の著わされた「インド仏教史」はカニシカ王の時代までを取り扱っているが、ここにはギリシャ学者としての師の深い造詣が充分活用されている。近年は「首楞厳三昧経」の飜訳を終えてそれは現在印刷中であるが、以後再び「大智度論」の残りの三分の二の飜訳に戻っている。ラモート教授が育てられた弟子の中ではホフィンガー（Hofinger）師があって、ヴァイシャーリーの仏典結果に関する著作を公けにし（これについては私は「通報」誌上で詳しく報告した）、また根本説一切有部の律のうち阿耨達池に関する伝説の部分の飜訳を公表した。しかし残念ながら彼は仏教学の研究から遠ざかり、ルーヴァン大学でギリシャ語の研究に専念している。先生の今一人の弟子はユベール・デュルト（Hubert Durt）氏であって、「法宝義林」の準備に協力するよう日本政府から任命されてここに来ているわけである（訳者註、デュルト氏は目下京都に滞在中）。

フランスではアンドレ・バロー（André Bareau）氏がいて、Ecole pratique des Hautes Etudes)での私の地位をついで、仏教文献学の「研究指導(direction d'études)」に当っている。これは、特に仏教の研究・教授のために設けられた、フランスにおける唯一の地位である。バロー氏は中国の資料を充分利用しており、[1] 特に「無為」の観念について論じた著書（この中には「法聚論 Dammasaingani」の飜訳もある）や仏典結集、仏教諸派に関する著作（この中には「異部宗輪論」の仏訳がある）、さらに漢訳律諸本にもとづく仏伝といった著述

をあらわした。現在は「舎利弗阿毘曇論」の飜訳を完了するところである。

一方ジャン・フィリオザ (Jean Filliozat) 氏は Collège de France のインド学教授であって、シルヴァン・レヴィ先生や言語学のジュール・ブロシュ (Jules Broch) 先生のあとを継ぐものである。フィリオザ教授は仏教にも興味を持ち、最近中央アジア出土の梵本によって「妙法蓮華経」を講読したり、また「月燈三昧経」を講読に使ったりしている。彼はルイ・ルヌー (Louis Renou) 教授と共に「古典インド (L'Inde classique)」という概説書の編集責任者になっているのであるが、そのうちインド及びセイロンの仏教に関する諸章はフィリオザ教授自ら編集したものである。ルヌー氏はパリ大学文学部のインド学教授であるが、彼は仏教への関心を全然持っていない(訳者註、ルヌー教授は最近逝去された)。

次にオリヴィエ・ラコムブ (Olivier Lacombe) 氏はやはりパリ大学文学部の教授でインド哲学の専門家であって、その講義の中で仏教の諸問題にしばしば触れることがある。またリリアンヌ・シルバン (Liliane Silburn) 女史は長い間インドに滞在して(特にカシミールでヨーガの研究をして)大作を発表した。その主題は仏教の刹那滅論に関するものであって、その表題は「刹那と因、インド哲学における非連続の概念」である。[2]

チベット学におけるフランス学派についていえば、それは非常に活況を呈している。その創設者たるジャック・バコー (Jacques Bacot) 氏は最近逝去されたが、勿論仏教に関心を寄せていた人である。マルセル・ラルー (Marcelle Lalou) 女史は「仏教研究文献目録 Bibliographie bouddhique」の編集責任者である。この Bibliographie bouddhique という国際的学術誌には多くの日本人学者も寄稿している。さらにラルー女史はフランス国立図書館に保存されている敦煌出土のチベット語文献の目録を作り、これを整理して非常に有用な著作を完成したのである。今一人のチベット学者セイフォール・ルエグ (D. Seyfort Ruegg) 氏はアメリカ生れだがフランスに住みつき、インド並びにチベット文献によって(中国の文献は無視している)、如来蔵思想に関して大部な学位論文を準備中である。さらに外国人で十四年来フランスに住みついている人にセイロンの学僧ワルポーラ・ラーフラ師 (le Révérend Walpola Rāhula) がある。彼は無著の「阿毘達磨集論」についての学位論文[3]を準備している。シュタイン (R.A. Stein) 教授はチベ

ット学者として著名である（近いうちに Collège de France の教授に任命されることになっている）が、この人は特にチベットに固有な仏教の諸著作に興味を持っている。

以上のごとく今日フランスの東洋学において、仏教が無視されてしまっているとは言い得ない。と同時にシルヴァン・レヴィ教授が亡くなってからは、フランスの仏教研究が多少光彩を失なっていることも事実である。この分野の専門家であるバロー氏にしてもフランス人の弟子は一人もない有様である。

イギリスにおいても北伝仏教に関する限り同様な状態である。ジョンストン（Johnston）氏がなくなり、ベイレー（Shackleton Bailey）氏[4]が東洋学を断念してラテン語の研究に変ってからその傾向は著しい。しかしパーリ語の分野では[5]今日でも活潑に研究が進められていて、代表的研究者としてホーナー（Horner）女史やウォーダー（Warder）氏をあげることが出来る。そしてパーリ聖典の精細な索引が続いて現われることになっている。ホーナー女史はいろいろなパーリ文献、特に律に関する文献、の新らしい訳註を著わした。この新らしい訳註にはその文献について近年になされた研究の成果が充分に考慮されている。今一人のイギリス人学者メンデルソン（Mendelson）氏は現代のビルマ仏教に関して興味のある社会学的研究を出版した。他の分野でエドワード・コンゼ（Edward Conze）氏[6]は「般若経」に関する文献や教理についてはヨーロッパ第一の専門家として知られている。

ドイツではグラーゼナップ（Hermuth von Glasenapp）氏の歿後、仏教学の研究はここでも文献学的傾向を帯びるようになった。すなわち東独のヴェーラー（Friedrich Weller）氏、西独のヴァルトシュミット（Waldschmidt）氏やシュリンクロフ（Schilingloff）氏の研究がそれである。この両氏はプロシヤ政府が派遣したフォン・ル・コック（Von Le Coq）の遠征隊がトゥルファンからもたらした梵本を非常に正確に刊行しようとしており、小乗の「大般涅槃経」、説一切有部の律の断片を刊行し、さらに最近では仏教のヨーガに関する断片で四～五世紀頃に中国で禅経として訳出されたものを刊行している。[7]

ウィーンではフラウワルナー（Frauwallner）氏が新たに雑誌（Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasien）を刊行して大乗仏教哲学に関する多くの論稿

を発表しておられる。そして氏はインド哲学全般にわたる巨大な歴史の作成を試みられ、その中で仏教は重要な位置を占めているのである。

イタリーではご承知の通りトウッチ（Giuseppe Tucci）の名があげられる（皆様の中には彼と親しくしている人もおられることと思う）。彼はチベットから莫大な量の文献を持ち帰った。その大半は仏教関係の文献であって、それを素材にして多くの出版をしている。[8] トウッチ氏の門下生であるニョリ（Gnoli）氏は優れた梵語学者であって、彼の著述の中では特に龍樹の「中論偈」のイタリー語訳をあげたいと思う。

次に北欧に上ってみると、コペンハーゲンでは Critical Pāli Dictionary が引き続いて刊行されている。この辞書の起こりはトレンクナー（Trenckner）氏にまでさかのぼり、今日その編纂事業は「万国学士院連合（Union académique internationale）」によって援助されているのである。

オランダは近世、仏教学においては光彩を放って来た。たとえばインド仏教についてはケルン（H. Kern）氏、中国仏教についてはドゥ・グロート（de Groot）氏、日本仏教についてはドゥ・ヴィセー（de Visser）氏という有名な学者があったのである。これらの学者の後継者として最近では私の旧門下の一人であるライデン大学のドゥ・ヨング（J. W. de Jong）氏があった。ドゥ・ヨング氏はチャンドラ・キールティの「中論釈」の一部をその飜訳とともに刊行し、また今日ヨーロッパの現存する唯一のインド学専門誌「インド・イラン学雑誌」Indo-Iranian Journal を言語学者キュイペー（J. Cuyper）氏とともに創設したのである。しかし彼も次第に仏教哲学から遠去かり、より専門的にチベット文献学に向うようになった。なお彼は今日ではオランダを去ってオーストラリアに住みつくようになり、キャンベラ大学のインド学講座を担当することになった（そこで彼は日本のインド学者湯山明氏を助手にしている）。ズュルヘル（Eric Zürcher）氏は秀でたシナ学者でライデン大学の極東史の講座を受け持っている。彼は英語で中国仏教史を公けにしたが、これは初期から鳩摩羅什以前までを含んでおり（表題は The Buddhist Conquest of China）、その中で彼は最近の中国や日本の諸研究をば批判的な検討を加えた上で利用している。彼のこの著述は今日この問題に関して我々が利用し得るもっとも優れた研究であると思われる。

最後にスイスについて一言しよう。ここでは東洋学者であるとともに音楽家でもあったレガミー（Constantin Regamey）氏はロシヤとポーランドで教育を受けた人であるが、ローザンヌ大学とフライブルグ大学で仏教に関する言語を教えている。彼は「月燈三昧経」及び「宝積経」類の飜訳に従事している。レガミー教授の弟子にはジャック・メイ（Jacques May）氏があって、数年来この美しい京都に住みついているのでご存知の方も多いと思う。彼はチャンドラ・キールティの「中論釈」の飜訳刊行を完了した後にシナ語・日本語の勉強にとりかかり、ここ数年来は「法宝義林」の編集にたずさわって来た。最初はフランス国立科学研究センター（Centre national français de la Recherche scientifique）の援助の下に、ついで昨秋から「極東フランス学院（Ecole française d'Extrême-Orient）」の所員となって、この編集に協力しているのである（この学院の本部はパリにあって、学院長はフィリオザ教授である）。

私は先程デュルト氏が日本政府の任命によってメイ氏とともに「法宝義林」の共同研究に従事していることを述べた。そこで最後に「法宝義林」について若干述べ、この日仏共同の学術計画の現今の状態を説明したいと思う。「法宝義林」については皆様も聞き及んでおられるに相違ないが、これは中国及び日本の資料にもとづく仏教の百科全書である（一層正確にいうと、日本語の表題に「義」といわれるように仏教教義に関する百科全書であって、個々の伝記や著述目録はなく、人名・地名等の固有名詞や著書の表題等も含まれていないのである）。これらの中国・日本の資料が仏教を理解する上に重要であるというのは、一つにはサンスクリット原本が大部分消失してしまっているという事実からであり、そして今一つは日本こそは今日最も力強く仏教の伝統が生き続けている国であり、特にそこでは仏教に関する研究業績が他のどこの国よりも活況を呈しているからである。このような百科全書的なものを作成しようという提案は一九二〇年にさかのぼり、「万国東洋学会連合（Assemblées fédérales des Societés asiatiques）」の名でその企画が打ち出された。その実現は一九二六年東京で試みられ、私の師シルヴァン・レヴィ先生と当時日本仏教学界の重鎮であった故高楠順次郎先生がその監修の地位につかれたのである。このようにして一九二九～一九三七年の間に、初めのうちは東京で最後はパリで、最初の四巻が刊行された。ここで第二次世界大戦が起こって事業は中断

され、私一人を除いてフランス側のすべてのメンバーを失なったのである。したがってその後引き続きフランス語の方で協力する新らしいチームを募集することは非常な困難に直面した。というのは先程述べたように仏教研究は若い世代には殆んど興味を持たれず、しかも「法宝義林」のような仕事は高度に専門化した資格条件を必要とするので、そういう人を簡単に見出すことが出来ないからである。

幸いにしてメイ氏とデュルト氏というこのような仕事にはうってつけの人が現われて、「法宝義林」は小さいながらも有能なチームを日本に送ることが出来たのである。実際フランス側にとってこの事業を継続するには、その協力者達が日本の現地にあることは避く可からざる条件である。というのは日本においては仏教学に関するあらゆる種類の便宜が備わっており、印刷・出版にしてもフランスよりも遙かに便利であり、且つ遙かに値段が安くつくからである。「フランス学士院(L'Institut de France)」の構成する五つのアカデミーの一つに「Academies de Inscriptions et Belles-Lettres」というのがあって、私もその会員であるが、そのアカデミーがこの「法宝義林」の残りの全巻を自己の出版物として受け入れ、そしてその費用はすべてアカデミーが持つという約束を私はすでに取りつけたのである。一方「法宝義林」のフランス委員会をパリに設立すべきだと考え、すでにそれを実現して私の多数の同僚もその委員会に加わっている。したがってもし私がたといこの世を去ることがあっても、その委員達の監査のもとにこの事業は永続することと思う。このようにして日仏両国間の久しい協力事業の成果がすべて成って、この仕事の完成の日を迎えることが一日も早からんことを私自身願っている次第である。[9]

(佐々木教悟 福島光哉 訳)

附註

① しかし明らかにインド的視野においてである。彼には多くの著作があって貢献している。

② マドレーヌ・ビアルドー(Madeleine Biardeau)女史はインド哲学、特にミーマーンサー(Mimāṁsā)哲学の専門家であるが、最近には仏教の思想に関する彼女の研究を進めようと開始した。多くの日本学者の一人にルヌードー(Renoudeau)会長がいて、日本仏教、特に日蓮や、能における仏教的要素、法然、親鸞に関する多くの書物を出版した。それらの選集を彼はユネスコ出版部から公刊したばかりである。

ベルナール・フランク(Bernard Frank)氏はl'Ecole pratique de Hautes Etudes の日本学教授であって、同じくユネスコから仏教色豊かな小話集である今昔物語の飜訳を出版する予定である。

③ そしてパーリのアビダンマの哲学と比較した無著の哲学についても論及している。

④ 彼はずっと以前からイギリス東洋学の専門家である。

⑤ Pali Text Society ではテキストの再版や新しいテキストの出版を続けている。

⑥ 現在はシアトルのワシントン大学に居住している。

⑦ シナ・日本に関しては、かってハンブルグ大学の教授であったグンデルト(Gundert)氏について言わねばならない。彼は碧巌録の最初の部分を忠実且つ念入りに飜訳して我々に寄与している。ヨーロッパにおいて禅はアメリカのごとく一つの正しい有り方は生れておらず、あらゆる種類の出版物で飜訳される程関心をひき起こしているが、禅の価値は多くの場合疑問を抱かれている。

⑧ 現在では西パキスタンのスワート(Swat)の峡谷で、考古学上重要な発掘の監督に当っており、同様にアフガニスタンやイランでも発掘している。

⑨ これは今日刊行されている他の仏教辞書や、英語で出版された一連の辞書類（セイロンのホーダス（Hodous）の仏教百科全書《Encyclopedia of Buddhism)、近く東京から出る和英辞典（Japanese-English Buddhist Dictionary)等》と重複することにはならないだろう、というのは第一に法宝義林の主題と資料が先程私が指摘したごとく限定されており、第二にそれは専門的な博識という特性をまとっており、それによって法宝義林は永く保存されるに違いないからである。